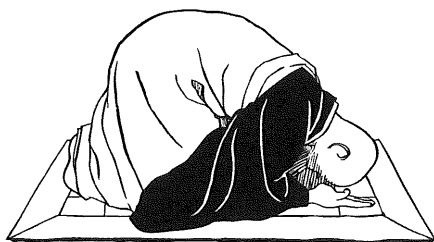




# 禅房十事 坐具



画：正親里紗

館 隆志

今回は「禅房十事」の中から、八番目に取り上げられている「坐具」を紹介します。「ざぐ」と読んでいます。

坐具というのは、礼拝する際に、袈裟が地面に直接つかないようにするために下に敷く布です。インドでは、もともとお釈迦さまが成道した際に敷いていた草（吉祥草）を模したものとされ、僧侶が、地上の草や虫から身を守り、袈裟や寝具が汚れないようにするための道具でした。

そして、坐具は中国に伝わり、同じように、僧侶が携え、五体投地の礼拝をする際に袈裟を汚さないように敷く道具として用いられました。

坐具の使用方法は、臨済宗と曹洞宗はだいたい同じです。坐具を敷いて、その上で合掌礼拝し、そのまま坐具の中央部分の白い布地のところに頭をつけ、両の手の平を上に向けて地に着けた後に、耳の高さほどに上げて礼拝します。普通、礼拝は三度がワンセットで三拝と呼ばれ、これを三回繰り返し返して合計九度行う場合は九拝といい、開山忌の時には六回十八拝して最大の敬意を示します。

このような道具の使用は、現存最古の清規『禪苑清規』に記されており、それに基づいた作法が鎌倉時代に日本に導入されます。もとの教科書が一緒なので、臨済宗と曹洞宗は共通する作法が多いのです。

ただし、坐具の現在の使用状況は、臨済宗と曹洞宗では、曹洞宗の方が坐具を敷く機会が多いようです。曹洞宗ではとても使用頻度が高い道具なのです。

禅宗の住持（住職）は、拄杖・扠子・竹篋などの道具を用いながら説法します。その他、実際には眼の前にあるものを指したり、手近なものを手に取ったりして、なんとか悟らせようとしています。時には拳を、時には棒を使い、厳しいものとなります。その厳しい指導方法は、臨済宗の特色の一つでもありました。中国や日本の禅語録の中では、そんな指導に使う道具の一つとして「坐具」が登場します。

多くの場合は、説法の合間に「坐具」を手に掲げて見せ、最後の言葉述べるといった具合です。しかし、稀に「打一坐具」という表現が登場します。坐具は布製なのですが、

これを何度も折り曲げて厚みを持たせ、細長い長方形の状態で携帯しています。どうやらそれでピシと勢いよく叩いたようなのです。なかなか痛そうですが、拳や棒で思いっきり叩かれるくらいなら、「坐具」で勢いよく叩かれた方ははるかにましな気がします。

このような、「坐具」の使用例は多くはありませんが、その一つとして興味深い問答が、臨済宗祖である臨済義玄禅師の『臨済録』「行録」に収録されています。

臨済禅師が金牛和尚の所に到着しました。金牛和尚は臨済禅師が見えたので、拄杖を横にして門の前に坐りました。臨済禅師は手で拄杖をもって三下して、堂内の第一座位に行きました。金牛和尚はそこに行つて質問しました、「客人と主人が会うには正しい礼儀を整えるものか。あなたが、どこからやって来たのかは解らないが、無礼ではないか」。臨済禅師が言いました、「老和尚、なんといわれましたか」。金牛和尚が口を開こうとすると、臨済禅師はすぐに打ち据えました。金牛和尚は、倒れそうになりました。



臨濟禪師はまた打ちました。金牛和尚が言いました、「今日についてはないな」。

臨濟禪師が金牛和尚をどうやって打ち据えたのか、ここには書かれていませんが、『臨濟録』に記された、臨濟禪師の普段通りなら、おそらく拳か平手です。あるいは手に持っていた拄杖（棒）かもしれませぬ。当時の禅問答は、まさにギリギリのところを相手を試したのです。もちろん、現代社会では問題ですが、これは中国唐の時代の話。本当に常人には理解しえない厳しい世界です。

ところが、宋代の大慧宗杲禪師の『正法眼蔵』では、臨濟禪師が金牛和尚を打ち据えた道具が、「坐具」と書き加えられます。そして、この話は、『臨濟録』に載っている当初の形ではなく、「坐具」が書き加えられている方で後世に用いられます。臨濟禪師は「坐具」を携え、身なりを整えていたが、問答に際して礼を欠いたと考えられたのです。

坐具は和尚さん同士の正式な挨拶の時に使用されます。部屋に招き入れ、互いに坐具を用いながら礼拝して、相手に対して敬意を表します。正式に和尚さん同士が会う時に

は、坐具を携えて互いに敬意をもって接することが、宋の時代の常識だったのです。宋代の「坐具」の追記は、正式な挨拶に際して、身なりを整え、礼儀を欠くことがないようにとの教えも含まれているのでしよう。

その昔、禅僧が道で出会った際に、合掌問訊（ごうしょうもんきん）して禅の問答を始めることを「挨拶」と言いました。その際に「不審（ふしん）（ご機嫌いかが）」と互いに声をかけることが本来の挨拶でした。突然出会ったときにも、やり方があるので。正式な挨拶であればなおさらですよ。皆さんが朝起きて「おはよう」と声を掛けることを、現在は「挨拶」と言いますが、もともとは禅僧の問答の声かけ「挨拶」が語源なのです。「禅房十事」の八つ目は「坐具」です。信仰の心、相手を敬う心、そして礼儀を忘れてはならないことを伝えているのではないのでしょうか。

館隆志（たちりゅうし）

一九七六年静岡県沼津市生まれ。二〇〇九年駒澤大学大学院博士課程修了、博士（仏教学）。現在花園大学国際禅学研究所研究員。著書に『園城寺公胤の研究』（春秋社）、『蘭溪道隆禅師全集』第一巻（共編、思文閣出版）。